

はじめに

「なんにも用事がないけれど、汽車に乗って大阪へ行つて来ようと思ふ」との名文が印象的な内田百間の特別阿房列車以降、鉄道を趣味とする人々は、なんにも用事がないけれど、汽車に乗って世界中へ行つて来ています。

内田百間を鉄道趣味人の嚆矢とするには異論があるかもしれませんが、夏目漱石にしろ、宮沢賢治にしろ、偉大な近現代史に残る人物たちが鉄道趣味上に印した足跡をたどるのは、日本近現代史を辿ることと言い換えることも可能かもしれません。

つきなみな表現になりますが、明治・大正・昭和と、日本近代化を文字通り牽引した鉄道は、時代が下るにつれ、近代化の動力源としての意義を失い始めます。動力近代化、モータリゼーション、そして IT 革命と時代の流れは加速し、容赦なくわれわれ現代人を押し包んでいます。鉄道も、近代化の中心から外れたにせよ、移動手段という側面では、現代社会で重要な地位を占めています。

ただ、日常の通勤・通学風景の中で、ふと目にする「会津高原尾瀬口」や「長野原草津口」の行き先表示にワクワクした経験はないでしょうか。この軌条の先に、我々の日常とは隔絶された世界がつながっていることを想像し、癒された経験はおありではないでしょうか。鉄道ファンは、そうしたあなたの日常をフィールドにして、趣味を行っています。

では、あなたの隣にいる鉄道ファンたちは、あなたにとってどのような存在だったでしょうか。あなた自身が、鉄道ファンである可能性が一番高いですが、一方で鉄道には全く興味がないぜ、という方もいらっしゃるでしょう。後者の場合、通勤・退勤時間に駅のホームで今から乗る何の変哲もない電車を撮影しようとしている、鉄道ファンに対して、少なからず好悪の視線を向けたことがあるのではないのでしょうか。

本研究では、そうした鉄道ファンがハマル「鉄道趣味」とは何かを、まず明らかにしていき、つぎに鉄道ファンに対するアンケート結果をもとに鉄道ファンの生活状況や趣味とのかかわり、さらにはインターネット時代の鉄道趣味という話題まで広範に取り上げています。そして、最終的に「鉄道ファン」とは何か、そして鉄道ファンが抱える問題を描き、鉄道趣味が単なる「趣味」の領域に留まらない点を指摘しています。

こうした「人」に対象の主眼を置く研究は、一橋大学鉄道研究会ではあまり類を見ないテーマです。今年、このようなテーマが選ばれた背景には、まず現在の鉄道ブームが実感として、徐々に終息しつつあること。次に、鉄道ファンが「勘違いした」行動に走っているのが目に付いた年であったからです。また、内部事情として、「多人数での検討を要する研究」を行えるのが本年しかないだろう、部長が徐々に社会学徒であった。など、本研究は種々の必然と偶然に裏打ちされています。

社会科学的に、客観かつ冷静に鉄道を研究する、という数年間にわたる本一橋鉄研の研究誌と異なり、「自分の目で直接に何かを見て、自分の口で意見を述べ、自分の手で文章を生む」という冷静でも客観でもない、第一人者の視点で本研究が行われています。しかし、社会科学の偉大な先人たちが遺した研究を手にとると、必ずしも「冷静や客観」が「第一人者として社会にかかわらないこと」ではないのは自明です。

Subject たる我々と Object たる我々、観察者と被観察者の同一性に、会員一同葛藤した結果、どのような結果が出ているかを判断するのは、さらに観察者である読者諸氏にお任せするしかありません。

鉄道ファンの方も、鉄道ファンでない方も、本研究誌を通じて、鉄道趣味とは何か、鉄道ファンとは何かを振り返っていただければ幸いです。